

対人援助学&心理学の縦横無尽(5)

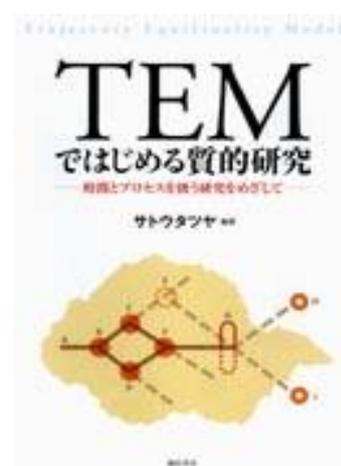
複線径路・等至性モデル、世界を駆ける



サトウタツヤ@立命館大学文学部心理学専攻

この頃、ありがたいことに、外国の研究者から「ぜひ来て講演してほしい」という依頼がくるようになった。ここで私がジンバルドーなら「健康上の理由からファーストクラスでしか移動しない！チケットを用意せよ！」などと言えるのだが（実話）、つまり招聘者がファーストクラスチケットを用意せざるを得なくなったりするのだが、私の身の上といえば実際には「予定していた予算の1/3しか獲得できなかったので、自腹で来てほしい」などというトホホな話になっている。それでも、きっかけ、チャンスをもたらえるのは本当にありがたいことで、2012年にはイタリア、ブラジルで講演のようなことをしてきた。いずれも文化心理学およびその方法論としての複線径路・等至性モデルに関する話や法と心理に関する話を学生・院生にしてほしいという依頼である。ぶっちゃけ、ブラジル（の一部）では、日本より複線径路・等至性モデルに関する研究が盛んだったりしている。

複線径路・等至性モデルとは、システム論に基づく質的研究法の一つであり、等至点に対する径路の多様性を認めようとするものである。研究者が調べたい、考えたい、と思う現象を等至点として設定し、そのことを経験した人（たち）に対してナラティブ調査などを行う。そしてその人（たち）が経験した径路を描くのである。ただし、その時にその人（たち）が経験しえなかった径路についても描くことを特徴とする。



2012年1月 イタリア

2012年1月末はイタリア。レッチェ大学のセルジオ（Salvatore 教授）とサレント大学のピナ（うーん、名字は何だったのか・・・）が呼んでくれた。いずれも南イタリアで、レッチェは長靴のカカトのあたり、サレルノは足のスネのあたりである。日本の中部地方が南北に連なる電車が無いように、イタリアは東西をつなぐ電車がなく、バスで移動ということになる。

さて、レッチェ大学ではマスターコースの文化心理学に関する大講義の一コマで講演を行った。私のつたない英語では何も伝



わらない恐れがあり、セルジオがイタリア語に訳して説明してくれている。授業が終わると記念写真を撮ろうとってくれる学生さんもいて、和やかに記念写真。ピースをしているのはイタリアの習慣では

なく、「日本人は口をあけずにピースサインをするのが笑顔なのだ」という話をしたため、それを喜んで実践してくれているのである。

この話はエモティコンの比較の文脈で出てくる。日本の顔文字は(^_^)ということだが西洋というか（東洋以外というか）では:-)のようなものが使用されている。単に縦横の違いだけではなく、笑顔を目で表すか、口で表すかの違いがある。そして、日本では、写真を撮るときには歯を見せずにピースサインをする、という話をすると興味を持ってくれるのである。



レッチェ大学ではこの他、大学院生たちとも小さなセミナーをもった。さらについてながらセルジオは奥さんが単身赴任中だとのことで、息子さんのお迎えをしている。その様子がこの写真である。



そして、サレルノに移動である。朝5時発のバスで5時間揺られて到着する。サレルノ大学は古くから医学が盛んであり、健康のための指南書であるサレルノ養生訓というもので知られている。ピナ（左）とルカ（中央）が院生セミナーでの講演を依頼してくれたのである。昼食



は白魚。実は、サレルノで5年間くらい使ったラップトップコンピュータの液晶が壊れるという悲劇に見舞われたのだが、ルカは親切にも研究室で余っているモニターを貸してくれた。それによってホテルでも仕事のできたのである。今思えば(今、これはサンパウロで書いているのだが)、この時に壊れてくれてよかった。ホスピタリティに感謝である。そして右の写真はピナのダンナである。日本につれてきたら映画俳優くらいできるのではないかというイイオトコでした。



サレルノでも、文化心理学と複線径路・等至性モデルについての小さなセミナーをもった。また、ピナが法廷外紛争解決の実践活動をしていることもあり、法と心理に関するプロジェクトについての相談もしてきた。

2012年2月末～3月 ブラジル

イタリアから戻ってきて卒論の口頭試問や大学院入試やその他もろもろを片付け、2月末にブラジルへ。

バイア州のサルバトーレで行われる「第二回、国際文化心理学セミナー」への招待をうけ、大げさにいえばゲスト・コメンテーターとして参加を招聘されたのである。アナ・セシリア（アナ・セシリアまで名前。ファミリーネームは何だったのか??）が率いるブラジルにおける母性を巡る文化心理学的研究の発表会を兼ねたセミナーである。研究が全部で10くらいあったのであるが、驚くべきことにその全てに複線径路・等至性モデルが使われていたのである。複線径路・等至性モデルは自分で言うのも何だが、面白いと思う。しかし、何もそんなに皆で使わなくてもいいのではないかとさえ思えたのであった。

さて、この文化心理学に関するセミナーは、クラーク大学のヤーン・ヴァルシナー（写真中央）を中心にした国際的ネットワークがブラジルに移動した観があった。それは大げさであるにしても、タニア（スイス）、ナンディッタ（インド）、日本（私）、アメリカ（ヤーン&ケニー）から関連する心理学者を招聘してセミナーを開催するアナ・セシリアの構想力には見習うべき点が多くある。



セミナーはサルバトーレに近い景勝地で行われた。風光明媚なところであり、何もこういうところでやらなくても、とも思うが、そういうやり方

も文化のあり方であるから、その雰囲気を楽しむことにした。部屋のまどから椰子の木が見え、その向こうに海が見える（大西洋）。



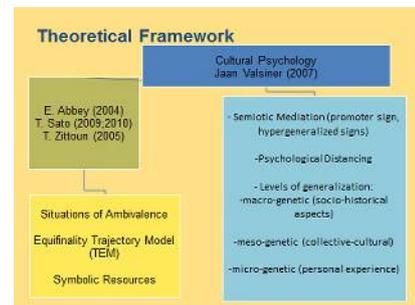
さて今回のシンポジウムを開催したアナ・セシリアは向かって右、左側は同じくブラジルのリビアである。心理学に限ったことなのかもしれないが、とにかく女性教員が多いという印象をもった。院生も多くは女性であった。

今回プレゼンされた研究は、現代ブラジルにおける「母性を巡る移行(transition)と不定さ (uncertainty)」を巡って行われたと総括できる。詳細に述べることは不可能なので、テーマを紹介しておきたい。

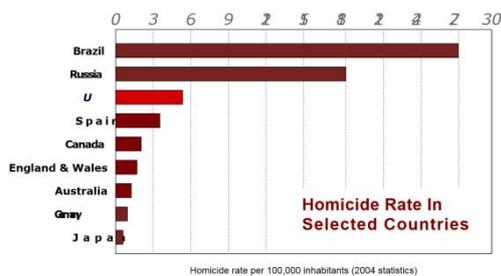
青年期における人生展望の消失、近代化の過程において従来の出産を選ぶという経験、繰り返される流産、HIV に感染しつつ子どもを持つこと、国を越えて（移民）子どもを持つこと、移民として子どもを教育すること、子どもを殺害されること、子どもを持たないこと、女であることを問うこと。

いわゆる「フツの結婚 and/or フツな出産」を巡る様々な思いや適応、という研究は今回の発表ではむしろ少数派であり、その周辺の様々な困難に焦点を当てられた研究が多かった。

こうした事情は、アナ・セシリアが公衆衛生に関心を持っていることとも関係しているが、それにしても、母性を巡る様々な困難が取り上げられている。右の図はある発表者のものだが、方法論としてのTEMが理論的枠組みの中に位置づけられて、用いられている。これらの研究はケースに対するインタビューであり、複線径路・等至性モデルを用いて、その径路（トラジェクトリー）の描写を試みていたのである。



研究内容自体にいろいろ驚かされたこともあった。子どもを殺された母親の研究では、子ども 7 人のうち 3 人が殺害された母親がいたとのことである。



びっくりして調べてみたところ以下のようなデータがあった。2004 年における各国の殺人率の比較である。ブラジルでは 10 万人あたり約 27 名が殺人の被害にあっている。日本は約 1 名。両国の人口は 1 億人強というくり方をすればほぼ同じであるから、この差には驚くばかりである。

http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Homicide_rate_by_country.svg

今回のシンポジウムは午前 3 時間、3 時間休憩、午後 3 時間、というスケ

ジュールで3日間行われた。楽しい中に苦しさあり、というか、英語が必ずしも堪能ではない私にとって、個々の発表を聞いてコメントをするというのが大きな負担だったのも事実である。真剣に取り組んでいるからこそ、休み時間が待ち遠しい。この雰囲気、何かに似ているなあとと思ったら、高校の時のフェンシング部の時の合宿であった。時計の掛かっている体育館で差し込む光の位置を頼りに、時間経過を計っていたことを思い出す。その時の監督が、「どんなに寝れなくても、夜は横になって休んでいる」という指示を出していた。これは聞くべき金言である。「疲れているのに寝れない」のではなく、「疲れているから寝れない」のである。横になって休んでいることで疲れがとれ、寝れるようになるのである。二日酔いの時の方が早く目が覚めたり、海外にいる時の方が寝れなかったりするのと同様の理由である。疲れているときこそ、肉体を休める必要がある。それはともかく、三日間の濃密な時間はゆるやかに過ぎていき、最終日は海外からのゲストたちがまとめをする時間であった。英語を母語として操っている人はいいが、こちらはそうはいかない。夜のエクスカージョンを断り、最終日の発表構想を練っていた。英語だけで勝負しても他のゲスト



より劣るに決まっているので、一計を案じた。会場にあったピアノを使うことにしたのである。心理学の重要概念に「ゲシュタルト」というものがある。これは日本語に訳すと(形態+全体)÷2のような概念であり定訳はないのだが、19世紀の哲学者・エーレンフェルスは、楽曲には個別の音が単純に足し合わされたものではないし、一方で、転調してもその質が変わらない

ということを強調し、その楽曲のもつ「その曲らしさ」の本質を「ゲシュタルト質」と表現したのである。つまり、音符の一つ一つを拾い上げてても楽曲の質を味わうことはできないし、あるいは全ての音符を同時に弾いても楽曲の質を味わうことはできない、ということである。音を音符として表し、そこに表現された構成を時間にそって弾くことによって、楽曲のゲシュタルト質を表現することができるのである。「さいた、さいた、チューリップの花が・・・」という歌は、ドレミ・ドレミ・ソミレドレミレ・と表すことができるのであるが、これらの音の中から任意に拾い上げて音を出していても、この歌にはならない。また、一度に全ての音を出しても分からない。人生の質



(Quality of Life) を考えるときに、音符を勝手に拾い上げたり、時間を無視して一度に全ての音を鳴らしているということは、無いだろうか？ そういうこ

とを実演つきで話したのである。思ったよりもウケて良かった。写真は、アンジェラにバイアの有名な歌、Asa Branca（白い翼）という歌の弾き方を習っているところである。相当久しぶりにピアノを弾いたので小指の筋肉が衰えていることがはっきり分かった。

最後に記念写真をとってお開き。しかし、この写真を撮るまでも大変だった。写真を撮ろうとしないし、列になろうとしないし。とはいえ、この写真が未来から見たときに歴史の1ページに成れば良いと思う。

合宿研究会の翌日は、UFBA（バイア連邦大学）で法と心理学のディスカッションと講演。アナ・セシリアがセッティングしてくれた。お互いに合宿が終わって疲れているところであるが、良い機会を与えてもらった。午前のディスカッションでは、法と心理学史の必要性や、心理学的なジャスティス概念について議論した。午後の講演では日本における法と心理学の展開を話した。法と心理学を担当している教員（正確には「法と犯罪の心理学」）が参加してくれて、議論も盛り上がった。



ブラジルでも日本食は人気があるということで、この日の昼食は日本食レストランにつれて



ってもらった。そこで寿司を頼もうとしたのだが、メニューに「New Sushi」と「Traditional Sushi」が



別々にあった。こういうときはモチロン現地化した寿司を食べるのが王道である。そこで、New Sushiを頼んだところ、このようなものが出てきた。フレ

ンチ化した寿司といったところだろうか。まあ悪くない、と行っていくつか食べてみたのだが、どうも変だと思うことがある。気になって、寿司を割ってみたところ、案の定、シャリが無かった。思えば、アナ・セシリアが頼んだ「サーモン・テマキ」なるものも、どう見てもシャリがなさそうであった。「大トロ握り一貫、シャリ抜きで！」「それって刺身じゃん」というような話を地で行くようなものである。



いよいよサンパウロに移動である。バイアからサンパウロは空路で2時

間強。人口2000万人の大都会である。サンパウロ連邦大学では、リビ



アがいろいろと骨を折ってくれた。彼女の指導する大学院生が、私が書いた論文を読んだ上で議論に参加してくれたのには感激した。複線径路・等至性モデルの基本となる文化心理学の考え方、とりわけ記号の機能に関する説明と複線径路・等至性モデルの手順について解説を行った。論文だけでは説明しきれないことも多く、こうした機会に

身近なやりとりができるのは楽しいことである。毎回強調することであるが、研究をするときに、TEMを使ってもいいがTEMに使われてはいけない、ということがある。ある種の方法論(M-GTAなど)は、方法に従うことが良いことである、という気持ちで勉強している人がいるような気がしてならない。大事なのは、研究テーマであり、対象者の生き方に敬意を払うことである。研究(者)が方法論に従うのではなく、方法論が研究(者)に従うべきなのである。

さて、サンパウロ大学での講演の直後、その午後にはいわゆる「先住民」も



と呼ばれるGuarani族の保留地(リザーベーション)を訪れる機会を得た。デニエロがその民族風習の研究をしていることもあり、同行することができたのである。サンパウロから南に50kmくらいのところに、Guarani族の保留地がある。昔ながら、というか、民族継承的な、というか、表

現は難しいが、暮らしを過度に近代化することなく、暮らしのあり方(Way of Life)を維持しようとする人々である。

現地に行ってみると、祝福の儀式、なるものが行われていた。宗教的リーダー(キリスト教ならPriest)が、交易を行う相手(いわゆる普通のブラジル人だったりこの部族を保護することを担っている人)を祝福する瞬間に立ち会うことができた。写真を撮ることはできなかったのだが、日々食料を運んでくる人は、頭をなでられ神の祝福を得ていたのである。ここでの神は、土着的な神とキリスト教の神とが融合した感じのものである(シンクレティズム)。生活必需品などの物資を運んできた人は、対価を受け取るのではなく、神から祝福を受ける。ここには、物々交換でもないし、金銭による売買でもない、一種独特の交換(エクステンジ)の仕組みがある。我々の一行は総勢7名で出かけたのだが、祝福の儀式に出席させてもらうという形をとった。そして、生活必需品も捧げさせてもらった(この写真の向かって右端がサンパウロ大学で心理



学と人類学を教えているデニーロである)。面白いことに、一度二度来ただけの人は神から祝福されない。宗教的リーダーに拝謁して言葉をかけてもらえるだけである。私もつたないポルトガル語で「Eu vin du Japon (日本から来ました)」のようなことを喋ったところ、「おお、よしよし良く来た」とばかりに目の前で拍手を打たれた。

普通では経験できない文化的ツアーであった。以上の内容は、帰りのタクシーの中でリビアが英語で説明してくれたものであり、正確ではないことも多々あると思われるが、諒とされたい。

ついでながら、ブラジルの心理学がどのようなものなのか、を折に触れて聞いてみたところ、サンパウロ大学の心理学インスティテュートは、実験、臨床、発達・教育、社会・産業、神経科学という5つの部門に分かれており、それぞれに30名ほどの教員が所属しているとのことである。そして、その150名の教員に対して、学部生(5学年)は合計600名ほど、大学院生も同じく5学年で合計600名ほどの定員だそうである。単純に計算すればS/T比が8:1である。連邦政府が運営しているとはいえ、すごいことである。心理学部に150人の心理学者がいるのである。さらにブラジルの心理学で驚いたのは、ミシェル・フーコーの考えが広く受け入れられていることである。日本の心理学者でフーコーを知っている、とか、何らかの影響を受けたという人がいったいどれくらい存在するだろうか。ほとんどいないだろう。ところが、ここブラジルでは、「職業としての心理学」50周年を記念してフーコー著作集の翻訳が、心理学者によってなされるとのことなのである。フーコーに限らず哲学的思想や認識論が重んじられている一方で、先住民の土着的(インディジーニヤス)な考えにも関心が払われている。臨床心理も神経科学もしっかりと組み込まれている。ブラジルの心理学は結構オモシロい、というのが私の結論である。北米型の心理学をモデルにするだけではなく、社会包摂的なブラジルの心理学をモデルにすることも、日本の心理学の選択肢としてあり得るのではないか、と思える。北米の心理学をモデルにするのもいい加減止めて目を世界に広げるべきであろう。ブラジルという国自体が発展中ということもあり、今後も目が離せないという印象をもった。是非また訪れてみたい。

ブラジルで気に入ったものは何かといえば、ブラジルだけではないが、ココナツ。その場で実を割って飲むのは私たちからすれば非日常的でおいしい。その他、各地の宿泊地での食事の様子をいくつか紹介するので、その雰囲気を感じ取ってもらえれば幸い



である。



最後に、食事に関しては、徹底した個人主義が根本にあるようで、食事は単品注文よりもバイキングを好むことが多く、個人支払いである。配膳後他者待ち行動などはモチロンなく、バイキングでとってきた順に食事を開始する、という感じであった。皆でわいわいとするような時でも（日本でいうところのコンパをするときでも）、注文は個別だし、支払いも個別であった。ウェイターが無線クレジット支払機を持って一人ずつ支払ってもらっているのである。日本では、混雑時の個別支払いはお断り、という表示があったりするが、これもまさに日本的な文化的マナーなのだなあと痛感した次第である。